

尹 伊桑：モノローグ

尹伊桑（イサン・ユン）は、日本統治下の朝鮮に生まれ、1971年に西ドイツに帰化した作曲家。無伴奏ファゴットのための本曲は、まずクラリネット協奏曲（1981）の緩徐楽章のソロ・パートから編み出される形で1983年にバス・クラリネットのための「モノローグ」として書かれ、翌年にファゴット版がつけられた。

プーランク：クラリネットとファゴットのためのソナタ

フランス6人組のプーランクは20世紀最大のメロディ・メーカーとも称され、管楽のための素晴らしい作品を多数残した。その中でもユニークな本ソナタは、兵役を終えた後、まだ20代前半の1922年に作曲。3つの短い楽章で構成され、プーランクの特徴である突き抜けた朗らかさ、精密なアンサンブル、どこか諧謔味すら感じる軽妙さを堪能できる。初演は1923年、パリのシャンゼリゼ劇場で行なわれた。

池辺晋一郎：バイヴァランス XVI ～2本のファゴットのために

二つの同じ楽器のための「バイヴァランス」は、1997年からスタートしたシリーズ。16番目となる本曲は、長哲也、福士マリ子という二人の若手奏者を念頭に、全音楽譜出版社の委嘱により2021年に完成。同シリーズでは初めての5楽章構成を採用。第1楽章は、2本のファゴットがまるで1本のように交代しつつ進む。第2楽章は、上行と下行が対照形をつくる。第3楽章は、遅いテンポの歌を阻もうとするかのようにちよっかいをかける。第4楽章は、分散音的なフレーズによる縄張り争い。終楽章では2つの楽器が協働するが、最後は再び冒頭楽章の「交代」へと立ち戻る。本日は初演者二人による再演。

P.エルサン：ニグン

フランスの作曲家フィリップ・エルサンが1993年に作曲した無伴奏ファゴットのための作品。ファゴット奏者パスカル・ガロワとの共同作業によって生み出された一連のファゴット作品の一つである。「ニグン」とはヘブライ語で「歌」を意味し、18世紀東欧のハシディズム（ユダヤ教の革新運動）では即興的に歌われる賛歌として発展した。聖なるものを感じさせる旋律、重音奏法、舌でリードを弾くスラップ・タンギングなどを用いて、「人の声」に近いファゴットの音色が神秘的なイメージへと導いていく。

小櫻秀樹：Split ～オーボエとファゴットのための（世界初演）

小櫻秀樹は日本、スウェーデン、ドイツを拠点に活動している作曲家。本曲は今回が世界初演となる作品で、タイトルの「Split」は「分裂」と訳される。短いフレーズ・旋律が常に違う組み合わせで反復され、小さな動きをオーボエとファゴットが追いかける形で構成されている。

ルトスワフスキ：木管三重奏曲

ヴィトルト・ルトスワフスキは、20世紀ポーランドを代表する作曲家。彼は第二次世界大戦中の1944年、ワルシャワ蜂起（ナチス占領下のワルシャワで起こった武装蜂起）の直前に母とともに辛うじて逃げのびた（彼が廃墟と化したワルシャワに戻ったのは翌45年春）。3楽章からなるオーボエ、クラリネット、ファゴットのための三重奏曲は、ちょうどそうした受難の時期に書かれた。ルトスワフスキはのちに「わたしは調性から自由な世界における自分の態度を模索していた。（…）わたしが管楽器を選んだのは、ピッチやリズム、音の組織化に関するわたしの研究が、管楽器であれば最も単純な方法で実現しうるからだった」と語っている。